

新座4Hクラブとの連携活動を通して地場野菜の有効活用を考える

On the effective use of local vegetables through collaboration
with Niiza 4 H club

小林三智子¹⁾

Michiko KOBAYASHI

宮城 道子²⁾

Michiko MIYAKI

緒 言

新座市は、古くからにんじん・ほうれんそう・さといもなどの露地野菜の生産が盛んな地域である。特に、にんじんは国の指定産地であり、この地域を代表する野菜となっている。近年では、首都圏の大消費地と隣接した地の利を活かした直売も盛んに行われている。

一方、都市化の進展により宅地化が拡大し、新たな住民が増加している現状があり、地域住民の理解と協力が不可欠な農業の継続について、住民の農業への関心が希薄化している感はない。

そんな中、新座市の青年農業者組織である「4Hクラブ」が、この地域で農業を継続し、新座の農業を盛り上げていくために、まず新座の農業を知ってもらう活動を行おう、と立ち上がった。

4Hクラブについて簡単に紹介する。農業教育への需要が高まるアメリカ各地において、1890年代から1900年代初頭にかけて、農業系の大学や研究所を中心にクラブ活動のようなものが展開され始めた。これらの活動が4Hクラブの起こりと考えられている。また、文書の中の言葉で初めて“4-H Club”が使用されたのは、1918年である。現在は、4Hクラブは、よりよい農村、農業を創るために活動している組織をいう。4Hとは、Head、Heart、Hands、Healthの4つの頭文字で、四つ葉のクローバーをシンボルとする。

¹⁾十文字学園女子大学人間生活学部食物栄養学科

Department of Food and Nutrition, Faculty of Human Life, Jumonji University

²⁾十文字学園女子大学人間生活学部人間福祉学科

Department of Human Welfare, Faculty of Human Life, Jumonji University

キーワード：新座4Hクラブ、地場野菜、食育、有効活用、地産地消

Key words : Niiza 4 H club, local vegetables, food education, effective use, local production for local consumption

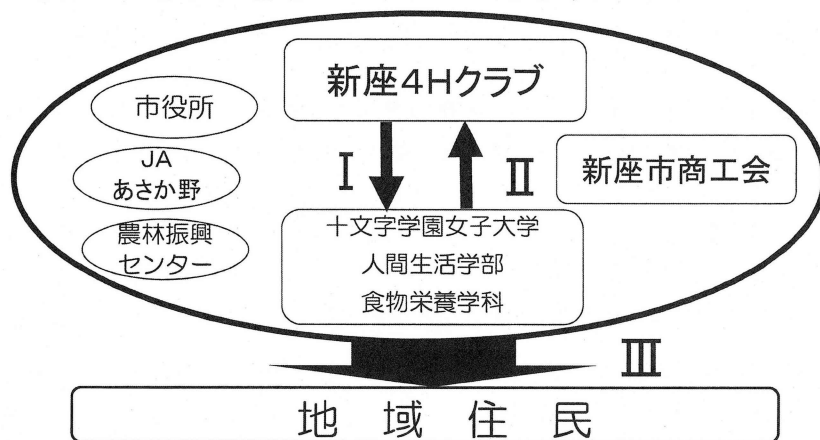
日本において、4Hクラブは、全国青年農業者クラブ連絡協議会（全協）を主体とした組織である。平成21年度の新座4Hクラブの構成員は15名で、その内訳は野菜8名・果樹3名・花き2名・植木2名の農家である。野菜農家で栽培している主要野菜は、にんじん・ほうれんそう・さといもであり、これらが特産といえる。

新座4Hクラブの農業を知ってもらおうという活動の呼びかけに対し、将来食育の中心的な役割を担う管理栄養士を目指す学生たちが参加を申し出た。こうして、学生が地元の青年農業者と連携し、農産物の栽培・収穫などの実体験を通じて農業への理解を深め、更には地域農業の活性化を促すことを目的とした新企画がスタートした。新座にキャンパスがある本大学と4Hクラブとが平成21年度に行った一連の連携事業を、この場をお借りして紹介させていただく。

実 施 方 法

連携事業への参加者は本学食物栄養学科3年生7名、卒業研究の指導教員1名、新座市の4Hクラブ員15名である。組織には、その他に埼玉県さいたま農林振興センター農業支援部、新座市役所、JA あさか野および新座市商工会が加わった。組織の連携体制を図1に示す。図に示したように、連携はⅠ：4Hクラブから食物栄養学科への働きかけ（農業を体験する機会の提供）、Ⅱ：食物栄養学科から4Hクラブへの働きかけ（新座の野菜を使った調理および加工品の開発）、そしてⅢ：両者協力して地域住民の方々に新座農業のPRを行う、という3つの柱から成る。

新座の農業をもっと知ってもらうために！



- Ⅰ 管理栄養士を目指す学生への農業体験指導
- Ⅱ 新座の野菜を使った調理及び加工品の開発支援
- Ⅲ 新座農業のPR活動（加工品の試験販売など）

図1 組織の連携体制

実 施 内 容

1. 農業体験 4Hクラブから食物栄養学科への働きかけ

新座市の特産であるにんじんの栽培を柱とし、主要な作業である種まき（平成21年7月30日）、間引き（同8月26日）および収穫（同11月5日）の3回は場実習を実施した。にんじんの栽培暦を図2に示した。さらに、その時期に応じた収穫体験を盛り込み、その他の地場野菜品目にも触れる機会を得た。種まきと間引きは新座市内の清水農園の畑をお借りした。清水農園ではにんじんとほうれんそう、さといもを、神田農園ではしょうが、ピーマン、なす、オクラ、ごぼう、すいかなどを収穫した。

6月	7月	8月	9月	10月	11月	12～3月
畑の準備	種まき	追肥 間引き			収穫開始	収穫終了

図2 にんじんの栽培暦

(1) 7月30日 にんじん種まきと野菜の収穫

最高気温が35℃の猛暑の中、清水農園でにんじん栽培の一連の流れの説明を受けた。裸種とコーティングされた種を見比べて、にんじん栽培において発芽が非常に重要であることを学んだ。その後、2種類の種を用いて、播種機と手蒔きの二つの方法で種を蒔いた（写真1）。発芽には十分な水が必要であることを知った。私も含めて、学生全員が畑での作業は初めてだったので、その大変さを十二分に感じた。

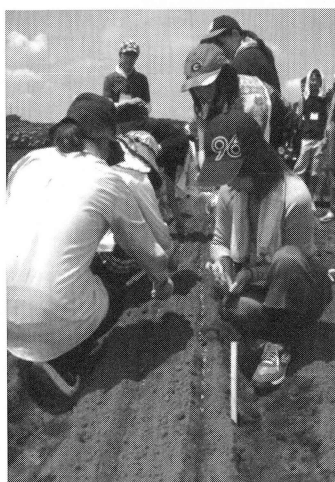


写真1 手蒔きと機械による種まき

次に、神田農園でなす・ピーマン・しょうが・おくら・ルッコラ・小玉すいかなど多くの野菜や果物を収穫した。ごぼうを手作業で掘るには大変な労力を要したが、学生は積極的に取り組んでくれた。実際の収穫方法や初めて見る野菜のなり方に驚いていた。10種類の野菜の中で特に人気だったのは意外にもしょうがだった。掘り出した時の強い香りが新鮮だったのと、土の中の生育の様子を初めて知った感動があったようだ。

(2) 8月26日 にんじん間引き

間引きは、生育に必要な空間を確保することや欠株を避けるために行う。種まきや収穫は機械の力を借りて実施できるが、間引きだけは手作業で行うほか手段がなく、腰をかがめての炎天下での作業は、短時間でも相当に疲労するものであった（写真2）。間引き作業があまりにも大変だったので、学生は4Hクラブ員に「種をまく量を減らして、間引きの必要がないようにしたらいいのでは」と質問した。4Hクラブ員の答えは「種は競わせてこそ、より大きく成長する。ある程度成長したところで、一番商品価値のあるにんじんを残す」だった。「競わせて成長させる」この言葉は間引きの重要性を表す重い言葉だったが、学生たちもにんじんの間引きから、人生の教訓をも得た様子であった。さらに、間引いたにんじんの山を見て、このまま捨てるのはあまりにももったいないとの感想があり、有効活用を考え、いろいろなアイディアがでた。残念ながら、4Hクラブ員に採用されるアイディアはなかったが、4Hクラブ員からは「間引いたにんじんの有効活用など、今まで考えた事もなかった。他の視点から農業を考えてみるのも面白い」との感想をもらった。間引きは機械ではできないため、多くの時間や労力が必要となるが、にんじん栽培において重要な過程となることを理解した。



写真2 間引き作業

(3) 11月5日 にんじん収穫

写真3はにんじんを収穫している様子である。畑一面に広がるにんじんの葉の鮮やかな緑色は、壮快だった。学生たちの様子が大変楽しそうで、自分で育てたにんじんを収穫する喜びを大いに感じた。また、作物を種から育てることの大変さを知った。さらに、収穫したにんじん洗い機が珍しく、盛んに写真を撮っていた。



写真3 にんじん収穫

2. 調理実習および加工品の開発支援 食物栄養学科から4Hクラブ員への働きかけ

(1) 11月5日 新座の特産野菜を使った調理教室

本大学の調理室において、新座産の野菜を用いて様々な料理を調理し、試食した。クラブ員は慣れない作業に四苦八苦だったが、学生と一緒に楽しく調理した。特ににんじんは、自分たちで種をまき、間引きし、収穫した野菜なので、一片たりとも無駄にしないという学生の意気込みが感じられた。畑での作業とは違って、ここでは学生たちが作業を主導し、野菜の扱い方や料理法などを4Hクラブ員に指導することができた。調理作業や試食を通して、農業や新座の話がたくさん聞くことができた。さらに、4Hクラブ員と学生の間で食についての情報交換ができた。4Hクラブ員と学生たちの相互の食育につながったと感じている。

当日調理した料理の中から、新座の代表的な農産物であるにんじんとほうれんそうを利用した、「キャロットタルト」と「にんじんとほうれんそうのプリッツ」を収穫祭で販売してみるようになった(写真4)。



写真4 キャロットタルト にんじんとほうれんそうのプリッツ

3. 地域住民の方々に新座農業のPR 食物栄養学科と4Hクラブが協力しての販売体験

(1) 11月8日 新座市民まつりにてスイーツを販売

新座市では毎年、新座市民まつりが11月に開催される。新座市民だけでなく、近隣の多くの地域住民が訪れるが、その中の行事の一つとして収穫祭がある。平成21年度は11月8日に実施され、4Hクラブと本学が共同して地域住民の方々に新座農業のPR活動を実施した。4Hクラブは採れたての地元野菜を販売し、学生たちはキャロットタルトとプリッツを試験的に販売した。学生たちの白衣姿が目を引き、手作りのレシピに沿えた効果もありタルト300個、プリッツ150袋が好評のうちに完売した。地域住民の方々へ新座農業のPRをすることができたとともに、学生たちは野菜の栽培から販売までの一連の流れをやり遂げたことで達成感を得ることができた。

(2) 連携事業がメディアに掲載

11月28日には、日本農業新聞に本学と4Hクラブとの連携活動が「農業ファンになって」という記事で紹介された。また、JA あさか野の広報誌12月号においては、巻頭特集が組まれた(図3)。さらに地元のケーブルTV『ホームタウン東上』の取材を受け、野菜の収穫および調理の様子が11月20日から12月3日までの2週間にわたってのべ42回放映された。



図3 JA あさか野 広報誌12月号 巻頭記事

(3) ジモトのおやつコンテストに参加

にんじん栽培を体験した学生7名が、埼玉県南西部地域振興センター主催の「ジモトのおやつ」アイデアコンテストに応募した。このコンテストは地域ブランド商品の開発・発掘や販路開拓を通じた地域づくり事業のひとつである。県内外から175点の応募があり、審査の結果、最優秀賞1点、優秀賞3点、特別賞6点が決定された。学生たちの応募した「さといもまんじゅう」が見事優秀賞を受賞し、そのレシピと作品は同センターのHPに掲載されている(写真5)。

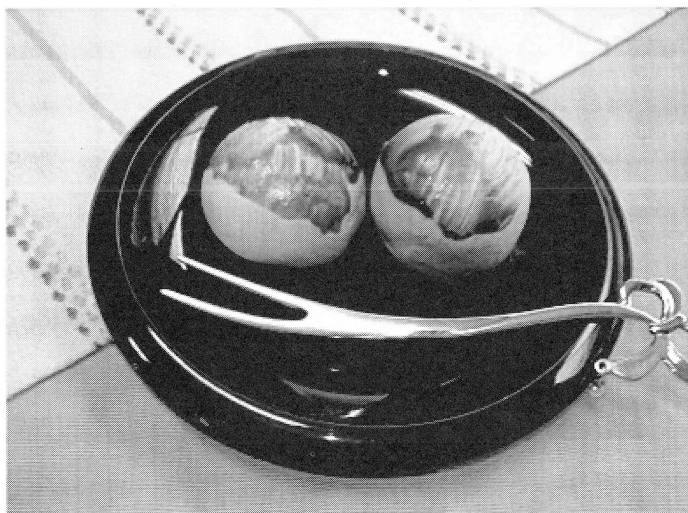


写真5 さといもまんじゅう

ま と め

平成21年度に実施した新座4Hクラブと本学食物栄養学科小林研究室の学生7名との連携事業は、初めての試みであったが、大きな成果を得ることができた。学生にとっては、農業体験が初めてであり、食育の観点からも貴重な体験をすることができ、将来の大きな糧となったと思われる。実施後のアンケートでは、「にんじんの栽培現場を初めて体験し、とても楽しかった。」「間引きのような大変な作業があることを初めて知った。」「農業に関わる仕事がしてみたい」などの意見が記述されていた。ふだん何気なく口に入れている野菜には、これだけの労力と愛情がかかっている事を実感できたことは、何にも代えがたい教育だったと感じている。

さらに、新座市民まつりで採れたての野菜とあわせて加工品を販売することで、地域住民に方々に触れ、新座農業をPRできた。また、今回の取組自体が注目されたことも、新座農業のPRにつながったと考えている。

今後の課題として、十文字学園女子大学と4Hクラブの連携活動を継続し、開発した加工品の商品化を目指すことが挙げられる。また、他の特産野菜の加工やより多くの地域住民への農業に対する関心を高めることが求められていると考える。

要 旨

新座4Hクラブの「新座の農業を知ってもらおう」という活動の呼びかけに対し、将来食育の中心的役割を担う管理栄養士を目指す学生が参加を申し出、連携事業がスタートした。連携組織には4Hクラブと食物栄養学科のほかに、埼玉県さいたま農林振興センター農業支援部、新座市役所、JA あさか野および新座市商工会が加わった。地元の青年農業者と連携し、農産物の栽培・収穫などの体験を通じて農業への理解を深め、地域農業の活性化を促すことを目的とした新企画がスタートした。

連携事業は4H クラブから食物栄養学科への働きかけ（農業を体験する機会の提供）、食物栄養学科から4H クラブへの働きかけ（新座の野菜を使った料理および加工品の開発）、そして両者協力して地域住民の方々に新座農業のPRを実施すること、の3本柱であった。にんじん栽培を中心として、種まき、間引き、収穫の一連の畑作業を体験し、さらにそれを調理に生かし、いくつかのスイーツについては、市民祭りの収穫祭において販売体験も経験した。農業体験が初めての学生にとっては、食育の観点からも貴重な体験をすることができ、将来の大きな糧となったと思われる。また、今回の取組自体が注目されたことも、新座農業のPRにつながった。



写真6 連携事業参加メンバー

謝 辞

本連携事業は平成21年度十文字学園女子大学人間生活学部共同研究費の助成のもとに行われた。このような機会をご提供いただいた埼玉県農林振興センターの平井氏および新座市役所の栗山氏に感謝いたします。さらに、農場を使用させていただいた新座4Hクラブ員の皆様に感謝いたします。また、本活動に協力いただいた小林研究室の学生、植田真悠子、梅津真理、江村友紀、木下涼子、嶋田梓、嶋田彩花、矢嶋ゆかりの学生諸姉に御礼申し上げます。